

## 後記

今回論文を寄せた何名かは鷺見誠一教授から直接薫陶を受けているが、本号の目次からも伺えるように、一口に政治思想研究と言っても、個々の研究テーマはヴァラエティに富むものとなっている。

こう切り出すと、師の学問的寛容さという「いつものお話」が始まると思われるかもしれない。けれども、少なくとも私がここで述べたいのは、それにとどまるものではない。

この後記を書くに際して真っ先に思い出したのは、ゼミナールや大学院の演習の場で・また研究会や学会の場で、鷺見先生が、古代から現代にいたる思想に対する若き研究者たちの取り組みに、事柄それ自体を問いつつ、絶えず私たちを啓発して下さった、そのことである。相手がスコラ学研究であれポストモダン思想研究であれ、先生はいつでも、真摯な問いを私たちに投げかけて下さった。「面白そうだね」という通り一遍の言葉が先生の口から発せられることは、一度たりともなかったと私は記憶する。

問いを「投げかける」ということから、しばらく野球における投球の比喩を用いたい。研究者の中には、学会などで、報告内容に応じて質問するスタンスを上手に変化させ

る方がいる。それはそれでたいした力量には違いないが、私などは傍で見ている。「球の出所がわからないなあ」という印象も否めない。これに対し鷺見先生の投げる問いという球は、常に一定のリリースポイントから放たれていた。コースは読める。しかし私が驚くのは、先生の放つ直球の威力である。しかもそれは年を追うごとに増していったように思われる。先生の下で学ぶ大学院生が増え、したがって彼らが扱う研究対象は多岐にわたるようになった。それでも先生は、これら多様な「打者」たちに対し、いつも決まったフォームから・しかもキレのあるボールで、ひとりひとりの懐をえぐっていったのである。相手によって問いただそうとする事柄がブレることはない。ひとりの人格が政治思想研究を血肉化するとはこういうことか、と私は何度も思われた。

これからも鷺見先生には後進たちに対し、思想研究が人間にとつて意味するものを、ご自身の存在をもつて示していただきたい。そしてそのためにも、先生の今後のご健勝を祈らずにはいられない。これは執筆者一同の変わらぬ気持ちであろうと思う。

二〇〇三年一月

法学部助教授 田上雅徳